

山に親しみ山に想う (35)

－韓国・摩尼山紀行－

(記 岡本)

我が国の創始を説く「古事記」(8世紀初編纂)に天孫ニニギノミコト(瓊瓊杵命)が九州高千穂の峰に降臨したと記されている。朝鮮においても山上に始祖が降臨したという神話的伝説が「三国遺事」(13世紀末)にある。北朝鮮の白頭山(中朝国境、標高 2744m)と妙香山(平安道、標高 1909m)、韓国の摩尼山に降臨したという伝説である。摩尼山は首都ソウルの西方 40km 程にある江華島(仁川広域市江華郡)の低山である。摩尼山にまつわる伝説は他愛のない筋である。五色の瑞雲と妙なる音と共に白髪白衣の老神(檀君)が摩尼山山頂に降り立ち、忽ちのうちに高さ 17 尺、周り 15 尺の祭壇を築いた。21 の石段を登り壇上で拝跪して、三千里の美しい山河の民を榮えさせると 100 日間祈った。やがて天空より「其方の民をして白衣を纏わせ精を出せば、常しえに榮よう」との声が下った。こうして始祖檀君は三千里の民草を統べ導くこととなった。

2003 年 6 月 1 日(日)、摩尼山(マニサン)を山行した。20 年程前の韓国世情の一端にも触れつつ山行の様子を報告する。

7 時前に漢江沿いのマンションを出て、地下鉄 4 号、1 号、2 号と乗り継ぎ新村駅で下車した。新村市外バスターミナルで江華島行き市外バスに乗るのだが、改札口付近にはバスターミナルの案内板がない。新村は近くに延世大学などがあって学生の溜まり場である。早速、女子大学生にバスターミナルは何処かと尋ねると、「江華島ね、ここをずーっと行かれると、いいです」と返ってきた。一応敬語を使っているが、現代若者臭がぶんぶんする語調である。

市外バスターミナルと称しても、駐車場広場に古い切符自販機が 1 台あるだけで全く資本投下していない。トイレもなく、近くの公園まで足を伸ばし用を足した。8 時 10 分発の江華行き急行便に乗車(3900 ウオン)、客は自分を含めて 2 人、金浦国際空港付近で 9 人が乗車してきた。金浦平野のこの辺りは、田植えが終わり、車窓には茫洋とした青田の広がり、白鷺が添景をなしている。心が寛ぐ田園風景である。

1 時間程の乗車で江華バスターミナルに着いた。摩尼山方面へ乗り換えるのだが、ターミナルの時刻表は壁に貼られたワープロ A4 版の 1 枚のみである。時刻表からは、摩尼山登山口へはどのバスに乗り、どこで降りたらいいのか要領を得ない。地べたにしゃがんで時間待ちしているバス運転手に尋ねると、9 時 55 分のバスに乗れという。何のアナウンスもなくそのバスは出発した。「江華摩尼」バス停で下車した際に 1400 ウオン払った。辺鄙な田舎のバスには切符は不要のようだ。10 人程が降りた。近くの信号まで 200m 程下ると、大型駐車場と「摩尼山国民観光地」の入口がある。入園料(1500 ウオン)を払って入ると(10:40)、意外にもマイカーで来ているハイカーが多いのに驚いた。



田舎のローカルバスターミナルや路線便が十分に整備される前に韓国社会がマイカー時代に急速に突入しているのを実感した。

摩尼山国民観光地に入ると、さすが摩尼山頂上までの登山路案内板があった。登りは、塹星壇(チャムソンドン、祭壇)経由で摩尼山頂上までのルートである。塹星壇までは階段路と檀君路があるが、人気のある階段路を選択した。20 分程で広場(トイレ、水場)に着く。ここより石段と小岩の山道が交互に続

く道になる。少し傾斜がキツく厳しい。下方に見える、紺青の絨毯のように風いだ江華湾が美しい。1時間程で緩やかな尾根上の小ピークにある塹星壇に着く(11:55)。

いつの時代に建立されたかは不明であるが、歴史的に高麗期 1270 年、李朝期 1659 年、1700 年に補修が重ねられたという。壇は上下に方と円の形をしており 3m 程の高さである。開天節(10月3日の建国記念日)に檀君を追慕する行事が行われる。現実に目にした祭壇には、始祖伝説を知ってか知らずか若者らが踏み込んでおり、厳粛さは毫も感じられない。深田久弥は高千穂の峰に登り「私は天孫降臨の聖峰に一人立って……皇祖発祥のあとを憶って去るに忍びがたいものがあった」(日本百名山の霧島山)と述懐している。数分で塹星壇を後にした。直ぐに山火事哨所とヘリポートが尾根上に出てくる。ヘリポートが象徴するように、ここから摩尼山頂上まで岩稜線の厳しいコースになる。岩稜のとぼ口には「墜落注意」「登山路危険区間 1km」と書いた警告版が立っている。岩稜の両側は緑の低木帯と草叢に落ち込んでいる。岩稜の累々とした岩の白い筋は、始祖檀君が頂上と塹星壇の間を歩いた道筋のように見える。頂上直下は危険度が高いので左への迂回路を採った。



12時55分、摩尼山頂上(標高 469m)に着いた。三角点と経緯度の表示板があるだけで取り立てたものはないが、江華湾(干満差は 8m)の眺望が印象的である。下山は浄水寺に降った。頂上からの下りの稜線は岩稜線から不思議にも普通の山道に変わった。

50分程の下りで浄水寺(新羅 639年創建、李朝 1426年再建)の傍の登山口に着いた。寺には大雄殿、三聖閣、石の三重塔がある。これらは皆小ぶりであるが、雅趣を漂わせて好感がもてる。大雄殿では婦

人 6名が丁重に叩頭している。聞こえる読経はテープで流されている(徳裕山白蓮寺等々でも)。韓国の寺では熱心な信者の姿をどの寺でも見る事ができた。それとは裏腹に寺側では手抜きでテープの読経を流していることがある。これには言いようのない矛盾を感じてきたが、寺も信者もこれを受け入れている。これこそ、韓国文化と韓国型宗教の本質のようなものが潜んでいるのではないかとの思いが払拭できない。浄水寺近くの「浄水寺入口」バス停から江華ターミナル行きのバスに乗った(14:30)

(了)